

ブログ「アラビア半島定点観測」:<http://ocin-japan.dreamlog.jp/>

ブログ「内外の石油情勢を読み解く」:http://blog.goo.ne.jp/maedatakayuki_1943

荒葉一也 Ocin Initiative(時事解説/評論):<http://ocininitiative.maeda1.jp/Commentary.html>

サウジアラビア:<http://mylibrary.maeda1.jp/SaudiArabia.html>

マイライブラリー: 0431

(注)本稿は 2018 年 1 月 9 日及び 11 日の 2 回にわたりブログ「アラビア半島定点観測」に掲載したレポートをまとめたものです。

混迷深まるサウジアラビア(その1):スケープゴートにされた大富豪アルワリード王子

2018.1.12

荒葉一也

Areha_Kazuya@jcom.home.ne.jp

釈放金 60 億ドル?



昨年 12 月 23 日付の Wall Street Journal は、リヤドのリッツ・カールトン・ホテルに身柄を拘束されているサウド家王族で世界有数の大富豪アルワリード王子について当局が釈放金として 60 億ドル(邦貨約 6,600 億円)を提示したと伝えた¹。

11 月初めにムハンマド・ビン・サルマン皇太子(略称 MbS)の指揮権発動により王族、閣僚、有力ビジネスマンなど約 200 人が汚職容疑で逮捕拘束された。当局は全容を明らかにしていないが、主な拘束者はアルワリード王子の他、王族ではアブダッラー前国王子息のミッテーブ王子及びトルキ王子(前リヤド州知事)、閣僚経験者のアッサーフ財務相、ファキーハ前経済・計画相、そしてビジネスマンでは国内最大のゼネコン、サウジ・ビン・ラーデン・グループのバクル会長、同じく国内最大手の旅行代理店 Al Tayyar Travel 一族の Nasser al-Tayyar など錚々たるメンバーである²。因みに父親から国家警備隊相のポストを継承したミッテーブ王子及びファキーハ前経済・計画相は共に逮捕の前日に解任されたばかりである³。

取調べの済んだ拘束者たちは順次釈放されつつあるが、伝えられるところでは釈放に際して当局から釈放金の額が提示され、それに応じた者が釈放されていると言われる。因みに 11 月末に釈放されたミッテーブ王子の場合は 10 億ドル(約 1,100 億円)を支払ったと報じられている⁴。アルワリード王子に対しては前記の通り当局から 60 億ドルが提示されたようである。毎年世界の億万長者の資産順位を公表している米 Forbes 誌によればアルワリード王子の資産総額は 187 億ドルとされ、世界第 45 位の富豪である(ちなみに 1 位はマイクロソフト創業者ビル・ゲイツの 860 億ドル、ソフトバンクの孫正義 CEO は 212 億ドルで世界 34 位)⁵。釈放金 60 億ドルはとてつもない金額であり、王子は資産の 3 分の 1 を失うことにな

る。王子自身は自分の資産は人生の 25 年以上をかけて築き上げた正当なものであり、拘束されること自体が理不尽で、釈放金の支払いには応じられないと側近に話していると伝えられる。そして彼は 2 カ月を経た今もリッツ・カールトン・ホテルに軟禁されたままである。

アルワリード王子の華麗なビジネス遍歴

アルワリード王子は 1955 年初代国王アブドゥルアジズの 18 男タラール王子の長男として生まれた。彼はサルマン現国王の甥であり、ムハンマド皇太子とは従兄同士である。但し父親のタラール王子はアブドゥルアジズ初代国王とコーカサス出身の王妃の間に生まれた男子であり、これに対してサルマン国王は良く知られている通り名家ステイリ家出身のハッサ王妃の息子、いわゆるステイリ・セブンの一人である。しかも若き日のタラール王子はエジプト・ナセル大統領のアラブ民族主義運動に感化されて祖国を捨ててエジプトにわたり、「自由プリンス」と呼ばれてサウド家改革運動を唱えた。しかしタラール王子の運動はナセルに利用されただけに終わり、結局彼はサウド家に詫言を入れ帰国したのであった。

このような経緯があったためタラール王子は実質的に王位継承権をはく奪され、息子のアルワリード王子も政府中枢における出世の道を断たれた。このためアルワリードはビジネス界に転身、国内建設業から身を興しシティ・バンク、フォーシーズンズホテル、アップル等々世界の一流企業への投資で現在の国際的富豪の地位を築いたのである⁶。

アルワリードはステイリ・セブンの長兄ファハド国王の時代にはサウジアラビアの国内投資には全く興味を示さなかった。当時のサウジアラビアには彼のお眼鏡に合う投資対象が無かったからであり、同時にファハド国王からスルタン皇太子兼国防相、ナイフ内相さらにサルマン・リヤド州知事(いずれも当時の肩書)に至るステイリ兄弟が政治経済の利権を独占しており他の王族が入り込む余地はなかったのである。

しかし国王がファハドからアブダッラーに替わると、アブダッラー国王は自分の子息を含めタラール王子やその息子アルワリードなどこれまで冷や飯を食ってきたステイリ・セブン以外の王族を積極的に登用、特に経済を近代化、国際化するため、国際経験豊かなアルワリード王子にアドバイザー的役割を求めたのである。アルワリード王子はアブダッラーの期待に応え、サウジ企業の株式を積極的に購入して株式市場を活性化させるとともに、自らもジェッダにドバイのブルジュ・ハリーフアをしのぐ世界最高層ビルの建設を推進したのである。

なおタラール王子は自ら王位継承を求めることができないが故に王位継承権を決定するサウド家の私的諮問機関「忠誠委員会」において率直な発言を繰り返し、スルタン皇太子が実弟ナイフ内相の副皇太子への任命を画策したとき、あるいはスルタンが亡くなりナイフ新皇太子がサルマンを副皇太子に据えようとしたとき、タラール王子は王位をステイリ兄弟でたらいまわしにすることに公然と反対した。このようにアブダッラー国王の晩年はそれまでと逆に、現在のサルマン国王、ムハンマド皇太子を含めたステイリ兄弟とその一族が冷や飯を食っていたと言えるのである。

親子二代にわたる遺恨の様相



このようにサウド家一族のこれまでの勢力争いの歴史を念頭に考えると今回の汚職摘発による王族の逮捕拘束にはファハド、スルタン、ナイフ亡き後のステイリ・セブンの最後の砦であるサルマン国王とムハンマド皇太子がムッテーブ王子などアブダッラー前国王派の一扫を画策、アルワリード王子はそのとぼっちりを受けてスケープゴートにされたと考えることができる。アルワリード王子に対する唐突な拘束と巨額の釈放金の要求にはサルマン国王・ムハンマド皇太子父子とタラール王子・アルワリード王子父子という親子二代にわたる遺恨の様相がみえてくる

のである。

ムハンマド皇太子は昨年 11 月のニューヨーク・タイムズのインタビューにおいて「我が国は 1980 年台から汚職にけがされ、検察当局は逮捕者から 1 千億ドルを回収できると見込んでいる」と語り、今回の王族摘発は権力掌握のためとの憶測を否定、「2015 年初めから当局に命じて内偵してきた」と述べている⁷。

しかし皇太子の言葉を鵜呑みにはできない。トランプ米大統領は今回の皇太子の勇断を評価しているが、トランプ大統領以外の世界中のメディアや政治家、評論家は汚職摘発の陰にサウド家内の権力闘争の臭いをかいている。特にサウジアラビアと深い利害関係を持つ金融界や経済界のビジネスマンたちは関心と同時にサウジ経済の先行きに強い懸念を抱き始めた。

アルワリード王子が本当に容疑を受けるような汚職に手を染めたのか、それが釈放金 60 億ドルに値するほどの大罪なのか、真相は明らかではない。ムハンマド皇太子は汚職のルーツは 1980 年代にさかのぼると述べているが、アルワリード王子自身はそのころは既に欧米での投資事業に軸足を移しており、国内ではほとんど活動していない。当時はファハドが皇太子として実権を握り、1982 年に第 5 代国王に即位すると、その後は 2005 年にファハドが亡くなるまで彼を頂点とするステイリ兄弟が国政を壟断する時代が続いたのである。その時期は丁度石油収入が右肩上がりに増え、インフラ開発に莫大な国費が投じられ、欧米諸国から巨額の武器を調達した時代であった。国内建設業者あるいは海外武器メーカーとの取引で巨額のリベートがファハド国王はじめスルタン国防相、ナイフ内相、サルマンリヤド州知事のステイリ兄弟たちに流れたと見てほぼ間違いないであろう。

その当時のステイリ兄弟にすればリベートは当然の分け前であり、石油の富は彼ら以外の王族あるいは一般国民にもいきわたっていたので罪の意識は薄かったかもしれない。しかし 21 世紀に入ると分配すべき富に限りが生まれた。分け前にあずかることのできる王族はアブダッラー国王の身近な王族や取り巻きに限られてくる。しかも国王の余命も長くはない。従って取り巻きの王族や高級官僚が競って蓄財に励んだであろうことは容易に想像できる。

近年汚職が蔓延し一般国民の間に支配層に対する不信感が高まったのは事実であろう。ムハンマド皇太子はその機運を捕えて政敵の排除に乗り出したと言えよう。アルワリード王子はスケープゴートにさ

れたのである。

今後の行方は？

アブダラー国王の子息ミッテーブは当局と早々と妥協、10億ドルを支払って釈放された⁸。しかしアルワリード王子は釈放金の支払いを拒否し法廷闘争に持ち込む構えを見せている。彼が本当に法廷で裁かれるのか、それともムハンマドとアルワリードが妥協し何らかの条件付きで釈放されるのかは予断を許さない。彼が拘束されている超高級ホテル リッツ・カールトンは2月25日から一般客の宿泊を受け入れるようである⁹。これから判断してアルワリード王子の処遇も近々決定するものと思われる。

ムハンマドはかなり頑なな性格の持ち主であり、カタール問題でもクウェイトの調停を無視し断交を続けている¹⁰。ここでも反イランで同調するトランプ米大統領の後押しが皇太子の強気を支えている。しかし妥協のない外交や政治は長続きしない。アルワリード王子も裁判に備えて超一流の弁護士を雇うであろう。場合によってはこれまでのビジネス活動を通じてサルマン一族の秘密を握っている可能性も否定できない。法廷で両者の暴露合戦が展開されればサウジアラビアに対する国際評価は地に落ちる。双方にとって何もプラスはない。

今回の事件はこれまでサウジアラビアと商取引や投資を行い、あるいは今後ビジョン 2030 のビジネスチャンスを狙う世界のビジネスマンにとってかなりの影響があろう。サウジアラビアの王族あるいは閣僚、有力ビジネスマンとの取引にかなり慎重になることは間違いない。今回の摘発はサウジ人だけであったが、今後場合によっては外国人ビジネスマンに累が及ばない保証は無いからである。あるいはそのような状況にもかかわらず間隙を縫って皇太子とその取り巻きに取り入り私腹を肥やす外国人も現れるであろう。機を見るに敏な彼らは暴利をむさぼった末、状況が不利と判断するや手のひらを返すように去っていくに違いない。サウジアラビアに汚職の種が尽きることはなさそうである。

いずれにしてもサウジアラビア経済は当分の間混乱と低迷の時代が続く予感がする。

以上

¹ “The Price of Freedom for Saudi Arabia’s Richest Man: \$6 Billion” on 2017/12/23, The Wall Street Journal
<https://www.wsj.com/articles/the-price-of-freedom-for-saudi-arabias-richest-man-6-billion-1513981887>

² “Anti-graft committee will ‘create new era of financial transparency’ in KSA” on 2017/11/6, Arab News
<http://www.arabnews.com/node/1188886/saudi-arabia>

³ “Cabinet reshuffle, crackdown on corruption in Saudi Arabia” on 2017/11/5, Arab News
<http://www.arabnews.com/node/1188521/saudi-arabia>

⁴ “Saudi prince freed in \$1bn deal: official” on 2017/11/30, Daily Tribune(Bahrain)

⁵ Forbes The World’s Billionaires: <https://www.forbes.com/billionaires/list/#version:static>

⁶ アルワリード王子の活躍については新潮新書「アラブの大富豪」第3章（前田高行著）参照。

⁷ “Saudi Crown Prince says anti-corruption drive is essential for the Kingdom’s reputation” on 2017/11/24, Arab News

<http://www.arabnews.com/node/1198521/saudi-arabia>

⁸ “Saudi prince freed in \$1bn deal: official” on 2017/11/30, Daily Tribune (Bahrain)

<http://www.newsofbahrain.com/viewNews.php?ppId=39980&TYPE=Posts&pid=22&MNU=3&SUB=>

[B=](#)

⁹ “Riyadh Ritz-Carlton to reopen doors for guests from Feb. 25” on 2018/1/5, Saudi Gazette

<http://saudigazette.com.sa/article/525507/SAUDI-ARABIA/Riyadh-Ritz-Carlton-to-reopen-doors-for-guests-from-Feb-25>

¹⁰ レポート「いよいよ GCC 解体か？—GCC 首脳会議を振り返って」参照。

<http://mylibrary.maeda1.jp/0429GccSummitDec2017.pdf>